

## 1 はじめに

### 8年目の天使

中熊秀喜

この一年も、医療費高騰、医師不足、地域医療疲弊、医療完璧性の誤解と要求など、医療環境は好転していない。国民の期待を背負った民主党政権も医療の在り方を含めた社会保障の青写真すら呈示できず、経済問題で萎れている。大学キャンパスでは板倉徹新理事長のもと新しい執行部が舵取りを任され、透明運営や公益優先で奮闘している。職員がそれぞれに夢を持てるような展開を期待している。

さて、血液内科関連では、昨年10月の腫瘍センター開設に伴い5階西病棟の25床を血液診療用、無菌室3床とVIP室3床は共通床扱いになっている。教官5人体制になり責任も増している。来年度中には現在の狭小医局研究室が通常大に拡充される。そのうちに中央診療部としての業務が急増している輸血部に専任医師が配属されて輸血・血液疾患治療部が発展的解消になり、中央部門輸血部および診療部門血液内科としてそれぞれ独立する公算が高い。

一方、かねてより医学生から血液内科教官は教育に熱心との評価を受けており、お世辞が含まれているにせよ嬉しい知らせである。病棟での村田先生、細井先生らの新人さんも同僚や患者さんから評判がよい。新宮市立医療センターで蒸野先生も活躍していると聞こえてくる。これも素直に喜ぶたい。彼らの成長およびそれが呼び水になりさらなる新人さんが入局することを願っている。来年度に向かって、その声も徐々に大きく聞こえつつある。7月に米国シアトル留学から花岡先生が帰国し、園木医局長、畑中病棟医長ともども医局の重責を担っている。そこで、臨床教育の一層の充実を図るべく1年間予定の毎月の公開血液塾を企画し、手始めに12月に「移植とクリティカルパス（講師は国立病院機構熊本医療センターの長倉祥一先生）」を開催した。今後もお楽しみに。

そろそろ、研究にも時間を割ける環境が整いつつあり、園木先生、畑中先生、花岡先生のみならず、大学院生の綿貫先生、栗本先生、島貫先生らの研究成果に大いに期待を寄せている。米国テキサスへ行かれた小島先生も元気に活躍している。

チーム医療に協力を惜しまない5西病棟および外来の看護師さん、輸血部、薬剤部、中央検査部、等の方々に改めて感謝致します。医局秘書の花井さんと濱口さん、いろいろ有り難う、これからもよろしく。最後におめでたい知らせ、

秘書であった大橋さんと東さんそれぞれに元気なベビーが誕生しました。医局の運営を任されて8年目、その医局の明るい将来を予知する天使達です。

## 2 教室現況

### (1) 教室員

医局	教授	中熊秀喜
	准教授	園木孝志
	助教	畑中一生
	助教	花岡伸佳
	学内助教	栗本美和 (大学院生)
	学内助教	島貫栄弥 (大学院生)
	学内助教	細井裕樹
	学内助教	村田祥吾
自治医大卒研修生	蒸野寿紀	(4月1日～)
	研究生	なし
	大学院生	綿貫樹里
	出向	なし
	留学	花岡伸佳 (H20.4.1～H22.6.30) 米国ワシントン州 シアトル市
	研修医	田中克典 (1月1日～2月28日) 辻本 弘 (2月1日～3月31日) 中山宜昭 (3月1日～3月31日) 玉城登妃子 (4月1日～6月30日) 木下和美 (4月1日～6月30日) 佐々木貴浩 (4月1日～6月30日) 加山由梨 (4月1日～6月30日) 朝田裕貴 (9月1日～10月31日) 長崎讓慈 (9月1日～11月30日) 河村英恭 (10月1日～1月31日)
	秘書	花井宏実 濱口尚子
輸血部	主査	松浪美佐子
	副主査	堀端容子
	副主査	中島志保

医療技師 清水勇輝  
医療技師 光野絵美 (6月1日～)

(2) 役割・責任体制 (血液内科医局 5月～12月)

園木：外来医長、副科長、教育主任 (4年生臨床医学講座「オーガナイザー」、学生臨床実習など)、保険請求担当医 (外来)、栄養管理委員、がん診療拠点病院担当医、電子カルテプロジェクトメンバー、身体障害者福祉専門分科会審査部会委員、和歌山県エイズ対策推進協議会委員、原爆被爆健康管理手当等認定医、更正医療担当

畑中：病棟医長 (入退院、当直表・日誌)、保険請求担当医 (入院、DPC、レセプト)、リスクマネージャー、がん化学療法プロトコール委員会、和歌山県骨髄移植対策協議会委員、移植調整医師、救急・集中治療連絡委員、感染予防対策委員

秘書：慶弔・渉外、薬の説明会

(3) 人事異動

医療技師 転出 山本華帆里 (4月1日)  
医療技師 転入 光野絵美 (6月1日～)

# 臨床実習

## 輸血・血液疾患治療部（血液内科）

集合場所：入院病棟 5階西 血内カンファレンスルーム（内線 2539）

☆コピーは病棟で行わず医局で行うこと☆

日付	8	9	10:30	12:30	14	15	16	17～
月		実習の 楽しみ方 (中熊教授)	症例学習			症例学習 【テーマ決定】(主治医)		17:00- 19:30 チャート カンファレンス
火		8:30-10:00 入院患者廻診 (中熊教授 /園木准教授)	症例学習		症例学習		15:00-17:00 血球形態を学ぶ (畑中助教)	
水		外来・内科診察 (中熊教授)		症 例 学 習	14:00-15:00 輸血部実習 (松浪主査)		症例学習	
木	カンファ レンス (CC/ MGH)	症例学習			症例学習		16:00- HIV感染症を 把える (園木准教授)	
金		症例学習			症例学習		16:00- レポート発表会/ レポート提出 (園木准教授) ※レポートは全員分と 教官用を準備	

自ら考え,自ら行動しましょう。

## 4 主な活動内容

### (1) 学術講演会

#### 1) 国内講演会

園木孝志：「micro RNA 発現異常によるリンパ球系腫瘍の発生」、第 22 回 Yong Oncologist Conference、1月29日、和歌山市

中熊秀喜：「発作性夜間血色素尿症 (PNH) の臨床と研究、その魅力」、学術講演会 臨床血栓・循環・血液セミナー (主催、田邊三菱製薬主催、藤村吉博奈良医大教授)、2月18日、大阪難波

中熊秀喜：「発作性夜間血色素尿症 (PNH) ～謎解きから血液難病へ挑戦～」、第 5 回春風セミナー (共催：万有製薬、東京NTT病院、臼杵憲祐部長)、3月11日、飯田橋、東京

中熊秀喜：「発作性夜間血色素尿症 (PNH) ～最新の分子病態と臨床～」、第 2 回順天堂大学血液疾患 Conference (小松則夫教授、ファイザー主催)、3月27日、本郷、東京

園木孝志：「悪性リンパ腫と白血病の治療について」、日本口腔外科学会近畿地方会、6月19日、和歌山市

畑中一生：「同種造血幹細胞移植について」、第 437 回「和歌山市医師会内科部会例会」、和歌山市医師会内科部会、ノバルティスファーマ(株)共催、7月22日、和歌山市

中熊秀喜：「PNHの病態と治療」、三重PNHセミナー (片山直之三重大教授、Alexion社共催)、9月17日、津市

中熊秀喜：パネルディスカッション「PNH診断と治療について」、日本PNH研究会・関西キックオフミーティング (Alexion社共催)、10月9日、大阪市

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）の分子病態と臨床」、岡山 PNH セミナー（杉原尚 川崎医大教授、谷本光音岡山大学教授、Alexion 社主催）、12月15日、岡山市

園木孝志：「薬物療法の基本理解」、つばさフォーラム in 和歌山、9月11日、和歌山市

園木孝志：「悪性リンパ腫」、つばさフォーラム in 和歌山、9月11日、和歌山市

花岡伸佳：「骨髄異形成症候群」、つばさフォーラム in 和歌山、9月11日、和歌山市

畑中一生：「移植療法の基本理解」、つばさフォーラム in 和歌山、9月11日、和歌山市

栗本美和：「分子標的薬の基本理解」、つばさフォーラム in 和歌山、9月11日、和歌山市

栗本美和：「多発性骨髄」、つばさフォーラム in 和歌山、9月11日、和歌山市

島貫栄弥：「急性白血病」、つばさフォーラム in 和歌山、9月11日、和歌山市

## 2) 海外または国際講演会

該当なし

## (2) 学会および研究会

### 1) 国内学会

栗本美和、松岡 広、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、園木孝志、平井慶充、吉増達也、中熊秀喜：「縦隔原発胚細胞性腫瘍－血液悪性腫瘍症候群の一例」、第8回日本臨床腫瘍学会学術集会、3月18~19日、東京

園木孝志、島貫栄弥、栗本美和、細井裕樹、村田祥吾、畑中一生、松岡 広、中熊秀喜：「サイクリン D3 発現を示す骨髄原発びまん性大細胞型リンパ腫」、第 8 回日本臨床腫瘍学会学術集会、3 月 18~19 日、東京

米谷 昇、畑中一生、玉置俊治：「自家移植後計画的に同種移植施行した多発性骨髄腫5例」、第93回近畿血液学地方会、6月19日、大阪市

辻本 弘、島貫栄弥、細井裕樹、村田祥吾、栗本美和、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「輸血関連急性肺障害の死亡例」、第93回近畿血液学地方会、6月19日、大阪市

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）～最新の臨床と研究～」、第 11 回日本検査血液学会教育講演（川合陽子会長、矢富裕東大教授）、7月24日、有明東京ビックサイト、東京

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症の診断と治療」、第72回日本血液学会 Morning Conference、9月25日、神奈川

Yutaka Enomoto, Masaya Shimanuki, Kinta Hatakeyama, Masafumi Taniwaki, Norio Asou, Hideki Nakakuma, Takashi Sonoki：「MiR125 induces hematological malignancies in vivo」、第72回日本血液学会、9月24日～26日、神奈川

村田祥吾、細井裕樹、島貫栄弥、栗本美和、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「抗生剤の使用方法が *S.maltophilia* 感染症に及ぼす影響の検討」、第 72 回日本血液学会学術集会、9 月 24 日～26 日、神奈川

畑中一生：「抗がん剤過量投与に対する顆粒球輸注の経験」、第 38 回和歌山悪性腫瘍研究会、12 月 11 日、和歌山

村田祥吾、畑中一生、細井裕樹、島貫栄弥、栗本美和、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「広域抗菌薬使用の工夫による多剤耐性菌への対策」、第 38 回和歌山悪性腫瘍研究会、12 月 11 日、和歌山

## 2) 海外または国際学会

Kanakura Y, Ohyashiki K, Shichishima T, Okamoto S, Ando K, Ninomiya H, Kawaguchi T, Nakao S, Nakakuma H, Nishimura J, Kinoshita T, Bedrosian C, Valentine M, Ozawa K, Omine M. Fatigue and impaired quality of life in patients with paroxysmal nocturnal hemoglobinuria (PNH) is associated with hemolysis, but not with anemia. 15<sup>th</sup> Congress of the European Hematology Association (第15回欧州血液学会)、6/10-13, Barcelona, Spain

## 3) 研究会

細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、栗本美和、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「免疫抑制剤の調整により二次性生着不全を回避できた一例」、第8回和歌山造血細胞療法研究会、アステラス製薬株式会社主催、3月6日、和歌山市

島貫栄弥：「ニコチン症例報告」、和歌山 Hematology Seminar 2010、ノバルティスファーマ社主催、10月15日、和歌山市

栗本美和、島貫栄弥、細井裕樹、村田祥吾、花岡伸佳、畑中一生、前田善政、中村 靖、園木孝志、中熊秀喜：「M 蛋白を検出できなかった $\alpha$ 鎖病の一例」、第35回日本骨髓腫研究会総会、11月20日、富山市

## (3) 学術論文

### 1) 和文原著

該当なし

### 2) 英文原著

Kojima K, M Konopleva, T Tsao, M Andreff, H Ishida, Y Shiotsu, L Jin, Y Tabe, Nakakuma H: Selective FLT3 inhibitor FI-700 neutralizes McI-1 and enhances p53-mediated apoptosis in AML cells with activating mutations of FLT3 through McI-1/Noxa axis. *Leukemia* 24:33-43, 2010

Hanaoka N, Jabri B, Dai Z, Ciszewski C, Stevens AM, Yee C, Nakakuma H, Spies T, Groh V: NKG2D initiates caspase-mediated CD3 $\zeta$  degradation and lymphocyte receptor impairments associated with human cancer and autoimmune disease. J Immunol 185:5732-5742, 2010

### 3) 和文総説

中熊秀喜: Case 5. 住民検診で貧血を指摘された女性 (発作性夜間血色素尿症)。  
New 専門医をめざすケース・メソッド・アプローチ 3 血液疾患 (嘉数直樹、岡本眞一郎、編)、pp43-48、日本医事新報社

中熊秀喜: 連載第8回 血液今昔物語、血液病-原典・現点「発作性夜間血色素尿症 (PNH) ~謎の原点」、血液フロンティア 20(8):122-126、医薬ジャーナル社

中熊秀喜: 「発作性夜間血色素尿症 (PNH)」、細胞 42(7): 8-11、ニューサイエンス社

中熊秀喜: 「発作性夜間ヘモグロビン尿症 (PNH) ~最新の臨床と研究~」、日本検査血液学会雑誌 11(3):336-343、日本検査血液学会

### 4) 英文総説

該当なし

#### (4) 著書 (単行本、シリーズもの含む)

中熊秀喜: 「発作性夜間ヘモグロビン尿症」、今日の診断指針 第6版 (総編集、金澤一郎、永井良三)、1089-1091、医学書院

中熊秀喜: 「自己免疫性溶血性貧血」、今日の治療指針 (総編集、山口 徹、北原光夫、福井次矢)、536-537、医学書院

#### (5) その他の印刷物（研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など）

中熊秀喜：インタビュー記事「血液医療 最前線のリーダーを尋ねる No.2」、Newsletter ひろば（NPO 法人血液情報広場・つばさ）、pp4-8

#### (6) 受賞等

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）における難治性造血障害の分子病態の解明と応用」、2010年度「生命科学研究助成」1,000,000円、武田科学振興財団

#### (7) 研究費、助成金

中熊秀喜：平成22年度厚生労働科学研究費補助金事業「特発性造血障害に関する調査研究班」溶血性貧血領域研究協力（班長 小澤敬也 自治医大教授）

中熊秀喜：平成22年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究C（代表）、発作性夜間ヘモグロビン尿症の関連の特発性造血障害の分子病態の解明

園木孝志：平成22年度東京大学医科学研究所共同研究費、MicroRNA発現異常による造血器腫瘍発生の機序

#### (8) 支援研究会など

第8回和歌山造血細胞療法研究会、特別講演「移植医療のインフラストラクチャー～移植コーディネートを中心に～」、上田恭典、倉敷中央病院血液内科・血液治療センター主任部長、3月6日、和歌山市

和歌山 Iron Over Load Forum、特別講演「鉄過剰症の病態と治療の進歩」、張替秀郎、東北大教授、ノバルティスファーマ社主催、7月9日、和歌山市

NPO 法人血液情報広場・つばさフォーラム in 和歌山：「血液がん より良い治療とより良い治癒」、NPO 法人血液情報広場・つばさ主催、9月11日、和歌山市

和歌山 Hematology Seminar 2010 「CML の分子病態と新たな治療戦略」、松村 到  
近畿大血液内科教授、ノバルティスファーマ社主催、10月15日、和歌山市

第5回和歌山血液フォーラム、特別講演「骨髄増殖性腫瘍の診断と治療」、小松  
則夫、順天堂大学血液内科教授、ファイザー社共催、11月5日、和歌山市

第1回和歌山血液塾 血液セミナー：長倉祥一（国立病院機構、熊本医療セン  
ター）、「造血幹細胞移植とクリティカルパス」、医局主催、11月19日、和歌山医  
大

#### (9) 海外出張

中熊秀喜：I-PIG 国際ミーティング、12月3日、Orlando, FL

中熊秀喜：第52回米国血液学会総会 (ASH)、12月3-5日、Orlando, FL

中熊秀喜：米国 NCI 研究打ち合わせ、12月7日、Bethesda, MD

## 5 診療実績

(1) 入院 患者総 (のべ) 数 (一時退院後を含む)	294 名
退院 患者総 (のべ) 数 (一時退院を含む)	301 名
(2) 外来	
患者総 (のべ) 数	5,316 名
内新患者数	233 名

入院患者疾病別分類 (入院のみ, 重複あり, 疑い症例を含む)

1) 白血病	87
急性骨髄性 (単球性等)	
M0	1
M1	2
M2	10
M3	22
M4	3
M6	5
Mixes	4
MDS→AML	7
急性リンパ性 (ALL)	24
慢性リンパ性 (CLL)	0
慢性骨髄性白血病 (CML)	8
CmmoL	1
2) 骨髄異形成症候群 (MDS)	7
3) リンパ性腫瘍	
非ホジキンリンパ腫	76
ホジキンリンパ腫	21
その他	
成人 T 細胞白血病 / リンパ腫	7
重鎖病	4

4) 形質細胞腫瘍	
多発性骨髄腫	37
5) 血球減少症 (造血不全含む)	
再生不良性貧血	2
汎血球減少症	1
血小板減少症 (ITP 等)	1
血球貪食症候群	0
その他の貧血 (鉄欠乏性など)	0
6) 溶血疾患	
自己免疫性	4
7) 骨髄増殖性疾患	11
8) 感染症	
HIV 感染症 (エイズなど)	6
9) その他	
造血幹細胞移植ドナー入院	20
アミロイドシス	4
原発性マクログロブリン	4
(3) 造血幹細胞移植	
1) 自家移植	25
2) 血縁	10
3) 非血縁	14
(4) 死亡	12
(5) 剖検 (率)	5 (41.6%)

## 6 リーダーレポート

准教授 園木 孝志

本病院に勤務して丸6年が経過した。私にとってこれまでで最も長く勤務している病院となった。おかげで、私が勤務一年目に治療を開始した造血器腫瘍の患者さんが完全寛解を5年維持し、患者さんにめでたく「治癒です」と伝えることもできた。臨床医として晴れ晴れしい気持ちであった。患者さんたちは5年間という長い間、再発の不安と戦いながらも、見事、癌からの生還者となられたのだ。その精神力に心から感服している。

研究では大きな進展があった。8年前に私自身が担当した急性リンパ性白血病患者さんから見つけた遺伝子異常が、マウスを使った実験で本当に白血病を生じることを証明できた。我々が世界に先がけてこの遺伝子異常を報告したのだが、奇しくも急性白血病を発症した第一例目のマウスの解剖も私自身が行った。私がかつてから望んでいた診察室の疑問を研究室で解決するという夢がかなった瞬間であった。この仕事は他の研究室の皆さんの力をかりつつも、和歌山から自信をもって世界に発信できる仕事だと思っている。今後はこのマウスを用いて白血病の新たな治療の開発を夢見ている。

ポリクリ実習生や初期研修医には筋道をたてて診断を推察し検査計画を立てるということを伝えたいと考えている。私自身は、生検を他科の先生方に依頼する際、病歴・身体所見あるいは検査所見をもとに、可能な限り組織型・表面細胞マーカー・遺伝子異常を推察してカルテに記載するように努めている。確定診断前の臨床診断を考える際には、ベストをつくすが間違いを恐れないようにしている。間違いは教訓となって次の診療に活かされるからである。学生や研修医に質問して一番失望するのは「わかりません」という返答である。若い皆さんの新鮮な視点に学ぶことも多いので、自分なりに筋道をたて考えたことを正誤に関係なく話してほしいと思っている。

最後となりましたが、血液内科の医師スタッフ、5西病棟のすべてのスタッフ、血液内科外来のスタッフ、血液内科を研修の場としてくれた初期研修医の先生方に深く感謝申し上げます。皆様にとって来年がよい年であるように祈念しております。

私が当大学病院の勤務となり1年半が経過しました。細井先生、村田先生や研修医の若い先生方を中心に病棟で一緒に臨床の仕事をしてきましたが、彼らの吸収力や成長の早さに、大きな喜びを感じております。大学病院が市中病院と大きく違う部分は、若い力が多いということです。病棟には日々の感動とドラマがありますが、若い先生方と分かち合える喜びは、自分のモチベーションの一つになっています。自分達が患者さんのお役に立ちながら成長できるという現場が病棟であると思います。

造血幹細胞移植についても、益々、症例数が増えています。悲しいことも多いですが、困難を乗り越えて無事に退院出来た喜びは、患者さんやご家族のみならず、我々の一生涯の財産になります。昨年度から2010年12月末までの1年9ヶ月で、同種移植39件、自家移植37件を行いました。最近では、月4~5件程度の件数を行っています。観察期間の中央値が約130日と未だ短いものの、現時点での、同種移植全症例での1年全生存率は63.2%で、第一寛解期の症例では1年全生存率は79.5%と比較的良好な結果となっています。

臨床研修ローテーションの研修医の先生やポリクリの学生さんなども、病棟で血液内科の魅力の一部でも感じ取ってくれていると思います。病棟で楽しく仕事をする先輩を見て、雰囲気の良いさも伝わっているようです。

また、次年度は更に新しいメンバーと一緒に病棟での仕事に取り組めることになりそうです。人数が増えれば、当然、充実する面が増える訳ですが、次年度は患者さんの治療を通じた研究に更に貢献できればと考えています。データベースを充実させて、過去の症例から多くのことを解析し、先の治療のエビデンス創りの元とします。

病棟の臨床レベルを保つには、メンバーが替わってもチームとして常に同じ判断が出来る必要もあります。それには、日々のカンファレンスなどでの議論も重要です。症例毎の経験をメンバー全員で共有できることが、チームの効率的なレベルアップに繋がります。

将来的には、患者さんの担当も主治医制からチーム制に進化できれば、一人一人の負担を軽減することが可能となり、限られた症例を多くの医師が経験することも可能となります。患者さんとの関係が主治医制に比べて希薄になると

の疑念も指摘されますが、看護師のように主担当を置いた上でのチーム制であれば、患者さんへのメリットも少なくないと考えます。

若手育成の基盤である大学病院の臨床や勤務環境のレベルが向上すれば、和歌山県下や大阪南部の近隣地域の医療の発展に必ず繋がると信じて、毎日、楽しく病棟での仕事を続けて行きたいものです。

## 助教 花岡 伸佳

7月1日に和歌山に戻り、はや半年が経過しました。2年間という長期にわたり私事に没頭させて頂きありがとうございました。この間、日本を外から眺めて”日本のすばらしさ”を再確認できました。後進的な印象のある医療や研究についてもアメリカに遅れてはいませんでした。むしろ日本の方が効率的、近代的、先進的と感じました。おそらく唯一最大の欠点は、自分たち自身に自信を持っていないことだと思いました。自分たちは最高の仕事をしているという誇りと堂々とした態度で何事にも前向きに取り組んでみましょう。これがアメリカ人の明るさの源だと思います。逆に、日本が勝っていると思っていたマナーや道徳心は、残念ながらシアトル市民よりも低いと感じました。これは信仰心の深さの違いにもよると思いますが、私達ももう少し人への思いやりと少しの余裕の気持ちを意識することが必要でしょう。どちらも心掛け一つで変えられます。新たな気持ちで、明るい未来に向かって来年も頑張りましょう。これから少しでもこの留学経験を生かし、伝えられるように私も努力して参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

それでは本題の和医大での今年を振り返ります。まず、担当している外来です。5月の第三期医療情報システム（完全電子カルテ）への移行が、今年のも大きな出来事でした。オーダーの仕方、検査結果の参照法、記事の記載法などの習熟という診療以外の部分にかなりの時間を費やしたのではないのでしょうか。外来を担当して頂いている先生方や田又看護師さんをはじめ外来のスタッフの方の忍耐と努力に感謝致します。ご苦労様でした。本年の当科の外来患者総数は、4500人前後と例年どおりでした。新患の予約待ちも最長2週間程度で、予約なし新患や当日病棟患者紹介にも即日対応できていたと思います。輸血や処置も多い中、特に大きな混乱やクレームもなく、少ない診療スペースを有効に活用し、十分な患者サービスが提供できました。地域の病院の協力関係も少しずつ良くなってきているようです。現状で大きな問題はありませんので、来年もこの調子を維持したいと考えます。コメディカルの移植コーディネーターの獲得は悲願です。来年も病院に働きかけていきたいと思います。

研究については、留学中のやり残した仕事をまとめる傍ら、本来のテーマである特発性造血障害と NKG2D 免疫の仕事を再開するために、研究室の環境整備を行いました。かなりの資金投資をしていますが、本年度は特に大きな成果は出ませんでした。来年は、投資に見合うよう1つでも多くの成果を残したいと

考えています。一緒に仕事をして頂ける人も現在募集中です。

学生教育には本年度は参加していません。来年度は可能な範囲内で貢献したいと考えています。血液内科の魅力を少しずつでも和歌山県内に浸透させていきたいです。

最後に、今年の夏はあまりの蒸し暑さにびっくりしました。15℃前後の爽やかなシアトルからのギャップでそう感じるのかと思っていたら本当に記録的な猛暑だったようですね。来年は心地よい夏であることを願っています。

今年6月から何年ぶりかで、輸血部のスタッフが5人に戻りました。それもすべて、正規職員で！！

では、まず、新しく輸血部の一員になった光野さんの自己紹介から。

はじめまして。光野絵美と申します。

和歌山生まれの和歌山育ち。学生の頃は数年和歌山を離れていましたが、ご縁があって、検査技師として和歌山に帰ってこられて、4年目になります。3年あまり病理検査業務に携わっていましたが、2010年6月より輸血部にローテーションとなり、4年目の新人となった次第です。

自分の不勉強さゆえ、日々の輸血検査で立ち止まってしまうことが、多々ありますが、輸血部職員の皆様に助けていただきながら、検査業務にあたっています。数ヶ月たった今も未熟すぎる私ですが、どうぞよろしく願っています。

最近、不規則抗体検査・クームス検査・クロスマッチで、判定や結果の報告に苦慮するケースが増加しています。血液内科の患者さんだけでなく、小児科・泌尿器科・救急と簡単に結果報告ができないケースは様々ですが、精査を実施するにあたっての基本、それは患者血球を生理食塩水で丁寧に（5～6回）洗浄することです。毎日とまでは言いませんが、1日で2～3人精査をしたこともあるので、平均すれば1週間に1回は患者血球を洗浄していたような気がします。

一方、末梢血幹細胞採取業務は、自家で23件（43回）・同種で9件（17回）実施しました。ほとんど毎週採取をやっていたような気がしましたが、意外にも採取が無かった週が18週もありました。今後、採取業務を「何処で、誰が実施するか？」という最終目標に向かっての移行期として、この1年、臨床工学技士さんと協力して業務に当たってきましたが、採取する側・される側どちらにとってもいい状態だったのではないのでしょうか？いずれ、採取業務は専門家である臨床工学技士さんに全面的に任せる時が来ると思いますが、このように、他部門と協力して一つの業務にあたるというのもいいものだなと実感しました。そして、このような形へと導いてくださった中熊教授と畑

中先生には大変感謝しています。

これからも、安全な輸血、安全な採取を目指し、みんなで協力していきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

## 「めざせ！！ゲゲゲの看護師」

5階西病棟 看護師長 塩路 有理

平成22年の流行語大賞は「ゲゲゲの～」でした。「ゲゲゲの鬼太郎」の原作者水木しげるの妻が書いた本がヒットし、NHKで朝の連続ドラマとして放送されていたこともあり流行語となりました。私は、実は「ゲゲゲの鬼太郎」が小さい頃大好きだったので、鬼太郎やその仲間が「妖怪」という怖いイメージはなく「やさしい仲間」でした。妖怪にもこんなやさしさをもった、仲間思いの妖怪がいるのです。だから、「ゲゲゲの～」は「仲間思いの～」と理解しました。私たち看護師は患者にとっても、医師やその他の医療者にとっても「ゲゲゲの看護師」でなければいけないと感じています。

移植医療が今年は軌道に乗って、件数も成績も上がってきていますが、まだまだチーム医療に求められていることは多いと感じています。そして、移植を受ける患者が何を求めているのか、どんなことを知りたいと思っているのかを、もっと患者の声に耳を傾け捉えていく必要性を感じています。平成23年はもっと、患者指導やパンフレットの充実に力を入れて、患者にとって「ゲゲゲの看護師」になれるように、がんばりたいと決意を新たにしています。

また、病院全体としても、今年は5月に電子カルテ導入があり、一時は混乱もありましたが、一致団結して頑張りました。その甲斐あって、今では看護師もみなシステムを難なく？使いこなしています。医師も看護師もみな頑張ったと自画自賛しています。

平成23年は看護部にとっては大きな変革の年となる予感を感じています。それは「7：1看護体制」の導入です。病院全体をあげて、7：1看護体制導入に力を入れてくれています。医師の協力なくしては、7：1看護体制の実現は難しいと考えています。7：1看護体制の実現は、医師との役割分担にも大きく影響すると考えています。今後とも更なるご協力のほどよろしくお願ひします。

平成23年が皆さんにとってよい年であることを念願しつつ、リーダーレポートを終えたと思います。ありがとうございました

## 7 主な来訪者（セミナー講師など）

長倉 祥一 国立病院機構熊本医療センター

（造血幹細胞移植とクリティカルパス、11月19日）

## ご報告

独立行政法人労働者健康福祉機構  
和歌山ろうさい病院 血液内科  
阪口 臨

当科設立から、2010年末で、丸5年となりました。

皆様のご支援により、今年12月をもって、当科は、院内標榜という内科の一分科から、正式標榜という独立した診療科に昇格いたしました。これは、内科全体での評価から、一診療科単独での評価を受けることを意味します。これまでの当科での実績を、本部である機構が、評価してくれたことによる措置であります。今後は、今まで以上に、しっかりとした診療科運営が要求されることとなり、身の引き締まる想いでいっぱいです。

また、昨年にご報告したように、当院全体に関わる業務も担当しています。外来化学療法室の運営、がん化学療法委員会、ICT、緩和ケアチームラウンド、などです。これらは、今後も引き続いて主導していく予定となっております。

これらすべては、一人で出来ることではありません。他科医師を含め、コメディカルスタッフなどの協力があって初めて機能できています。

この5年間、無欠勤で過ごし、仕事場にご迷惑をかけずに済んだのは、私のそばで心身共に献身的に支えてくれた家族のおかげだと感謝しています。

家族をはじめ、私の周りの皆様の力添えがなければ、当科の業務は遂行できないことを常に念頭において、与えられた職務に励んでいきたいと思っておりますので、今後ともご高配、ご協力賜りますよう、宜しくお願いいたします。